

東京発

# いわて 人財力

-11-

高校野球の指導者としてスタートした教員生活。30年余を経た今、東京学芸大副学長として、日本の教員養成の大改革を指揮する。

学校現場では、教員が一方的に教えるのではなく、児童生徒一人一人の意欲を高めたり、自立した学びを促す質の高い指導力が求められている。同大は2008年度創設した教職大学院を来年度、定員40人を210人に拡充。指導力を備えるスクールリーダー養成に本格的に乗り出す。「教員に求められる質がハイレベルになっている。日本の教員養成を変える大きな試み」と教職大学院長としても陣頭指揮を執る。

## 東京学芸大副学長

佐々木 幸寿(奥州市出身)



「現場を知っているのが強み。やりがいがあるから頑張れる」と語る佐々木幸寿さん

# 教員養成改革に情熱

佐々木幸寿(ささき・こうじゆ)東北大学院修了。高校教員、県教委を経て06年信州大助教授。東京学芸大准教授、教授を経て16年から副学長、教職大学院長。専攻は学校法学、教育行政学。教育学博士。奥州市出身。58歳。東京都小平市在住。

「残された人生、どこまでやれるかチャレンジしてみたい」と県教委勤務の45歳で研究者の世界に飛び出した。今も挑戦心は変わらない。「90歳、そして100歳にな

研究面では、教育基本法の第一人者で「学校法務」に力を入れる。いじめ問題などで、弁護士が学校現場に介入し、混乱が生じている。学校側の対応について、子どもの人権、法律と学校の正常な運営のバランスをどうとるか。弁護士との対応や活用など現場で求められる専門知識について研究する。「社会全体に影響を与えることができる。研究成果

は半永久的に残る」とやりがい語る。

農家の長男。「地元に戻りたいし、野球指導もしたい」と高校教員となった。黒沢尻北、一関などで教え、野球も指導した。この間、上越教育大(新潟県上越市)に2年間派遣され、教育学を研究。

(第2、第4月曜日掲載)

**世界への力** 世の中を先に進めるための自己主張を。出るくいは打たずに育ててほしい。

# 東京発 いわて 財力

—12—

話題を集めるテニスの大坂なおみ選手や錦織圭選手、卓球の石川佳純選手らスポーツ選手、モデルのマネジメントからスポンサー契約、イベント企画運営、テレビ、インターネット番組の制作・販売などを手掛けるインターナショナル・マネジメント・グループ（IMG、本社・米国）。奥州市江刺出身の菊地広哉さん60は同社の日本における代表を務める。

## IMG日本代表

### 菊地 広哉（奥州市江刺出身）



「アスリートファーストの姿勢を大切にしたい」と語る菊地広哉さん

## 選手第一の姿勢貫く

8割を占めるが、今もアスリートファーストを強く心掛ける。イー（多様性）と期待する。代表として各部門の統括のほかにも、スノーボードの平野歩夢選手らのマネジメントも直接手掛ける。根底にあるのはスポーツへの愛情。水沢高次郎、立教大は合気道、博報堂でもラグビーに触れるはず」と評価。「彼女のよな人を日本のスターとして認めるのが真のダイバーシテ

「アスリートファーストの姿勢を大切にしたい」と語る菊地広哉さん

菊地 広哉氏（きくち・こうや）立教大文学部卒。81年博報堂入社。GEエジソン生命宣伝広報部長、マイクrosoft MSN事業部マーケティングディレクターを経て、04年、IMGに入社。現在の役職は、IMG東京支社シニアバイスプレジデント・マネージングディレクター・ジャパン。奥州市江刺出身。60歳。神奈川県在住。

と、関連したイベントや番組などに触れ、多くの人が喜んでくれること」と強調する。交渉相手の米国人らに「ネバーギブアップの姿勢で仕事に取り組む」と評価されるのは「岩手人らしい粘り強さのおかげ」と自己分析。「仕事面でも岩手と関わりを持ちたいとトライしている。岩手でもスポーツを楽しむ環境がさらに広がってほしい」と望む。（第2、第4月曜日掲載）

### 選手への声

スポーツは楽しむべきもの。気軽に参加したり、応援してほしい